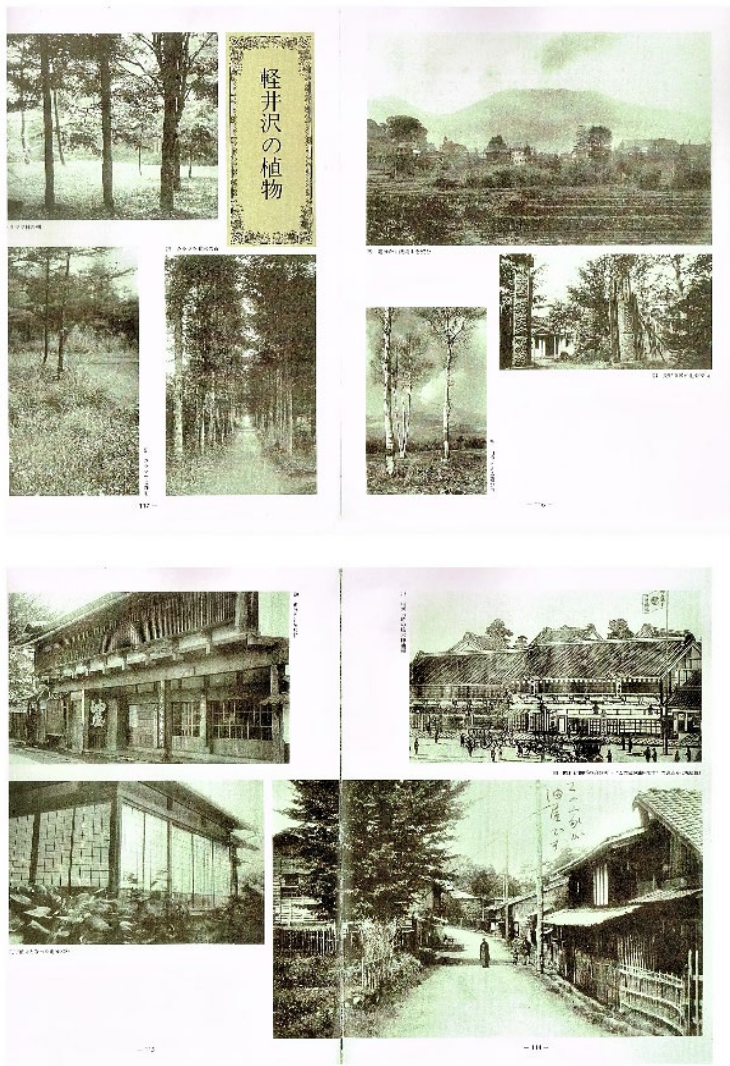


(6) 夏の追分

1936(昭和11)年の冬、第5学年の終わりには第一高等学校の再度の入学試験がやってくる。父信一は次の試験には何としても合格しないとならぬと考えたのだろうか。夏季休暇に加藤と妹を信濃追分の油屋旅館に逗留させた。追分油屋旅館は、高等文官試験などを受ける予定の学生が受験勉強のために逗留する旅館として知られていた。それに刺激を受けて、加藤も受験勉強に励むように計らったのだろう。油屋旅館を紹介したのは、父信一の患者であった風間道太郎だったと思われる。



(写真上：追分風景：中島松樹『軽井沢避暑地100年』国書刊行会、1987年

写真下：油屋旅館：「油屋旅館と文化磁場油やの歴史」<https://aburaya-roject.com/history/>

ところが、追分は、加藤が生涯の盟友である中村真一郎（1918—1997）や、のちに詩人となる建築科の学生だった立原道造や、詩人・作家として活動をしていた堀辰雄と知己を得る場所になった。これ以降、晩年に至るまで、夏季には追分で過ごす習慣をもった。その契機となったのは、1935(昭和10)年の夏に過ごした追分の体験であった。